

これから私の大好きなおじいちゃんについて話します。私の祖父は要介護二とされてきました。要介護とは文字通り介護を必要とする人の事を指します。また軽度の認知症を患っていました。私の事もあまり覚えていませんでした。でもとても穏やかで、過去の話を楽しそうに語ってくれるそんな祖父です。

私が小学校に上がる時ぐらから少し認知症の症状が見られていたそうです。私が小学生の頃ぐらいには普通の人とはちがう祖父の行動、言動が少し嫌に感じていました。それと同時にデイサービスに祖父は行きはじめ祖父の表情が明るくなった、そんな気がしました。

私には介護士さんがお話しされた事が心に残っています。

「人生の大先輩の心の優しさ、おおらかさに触れられる大事な機会だよ。」

私は祖父と話す時は大きな声で近くで話すようになりました。祖父の思い出はどれも楽しい思い出でした。祖父はとてもおおらかな優しいひとでした。しかし、そんな祖父も入院をくり返し、誤嚥性肺炎によりすごく弱っている状態でした。食欲がなく食事も困難でした。自分で歩行もできず体重は四十キロを切りました。そんな私の大好きな祖父も七月十日に息を引き取りました。すごく優しい顔でした。まるであの楽しそうな話をするときのおだやかな顔でした。すごくすごく悲しかったです。でも大切なことに気がつくことができました。それは、今のあたりまえにいる人を思う事、大切にすること、家族がいること、友達がいる事は、あたり前のものであたり前ではないのです。今が永遠に続きいつもいた人と同じ生活をおくれないかもしれないのです。私のおじいちゃんがそうであったようにどの人も少しずつ変わっていきます。だからこそ一人一人が相手を思うことが大切だと思います。私は家族と過ごす毎日に感謝することをおじいちゃんに気づかせてもらいました。